第１回
コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議

コロナ禍において、子どもたちの放課後の過ごし方はどう変化したのか？
各現場の報告から考える

実施報告書

日　　時：　2021 年 3 月 24 日（水）18:30-21:10
場　　所：　オンライン会議システム（zoom）
主　　催：　公益財団法人みらいファンド沖縄
協　　力：　NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく
公益財団法人みらいファンド沖縄

【報告】第１回コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議

■日　　時：2021 年 3 月 24 日（水）18:30-21:10
■場　　所：オンライン会議システム（zoom）
■着席者数：11 名（論点提供者、司会、記録者含む）
■参加者数：19 名（NPO・市民団体、福祉・医療機関等）
■主　　催：公益財団法人みらいファンド沖縄
■協　　力：NPO 法人まちなか研究所わくわく
■お問合せ：NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供　**鶴田 厚子 氏**

（公益財団法人みらいファンド沖縄

『コロナ禍で孤立した NPO とその先の支援』事業プログラムオフィサー）

コロナ禍において、子どもたちの放課後の過ごし方はどう変化したのか？各現場の報告から考える

公益財団法人みらいファンド沖縄では、休眠預金を活用したコロナ禍における緊急支援助成の事業を 2020 年 11 月から約半年間実施しています。現場で活動する「実行団体」6 団体中 5 団体が、児童館、学童、子ども食堂、子どもの居場所などで子どもたちと身近に接する活動をしています。これらの団体から、コロナ禍において子どもたちに何が起こったか、子どもたちの自由はどこまで制限されたかなど、現場からの報告に耳を傾け、そこから学ぶべきこと、改善にむけての方法はないか、一緒に模索します。

センターメンバー

鶴田 厚子
公益財団法人
みらいファンド沖縄
プログラムオフィサー

南 信乃介
特定非営利活動法人
１万人井戸端会議
代表理事

宮城 薫
一般社団法人おきなわ
ジュニア科学クラブ
代表理事

今木 ともこ
特定非営利活動法人沖縄
青少年自立援助センター
ちゅらゆい
事業推進部長

上原 玲子
一般社団法人
琉球フィルハーモニック
事務局長

センターメンバー

山崎 新
那覇市国場児童館
館長

島村 聡
沖縄大学 人文学部
福祉文化学科
教授

中村 圭介
那覇市議会 議員

新垣 綾子
沖縄タイムス社 学芸部
くらし班 記者

➢ 地域円卓会議の動画記録

・公開日：2021 年 3 月 31 日

・URL：https://youtu.be/vie0Y2gFwN8

➢ 今後のアプローチの方向性（提案）

1) 子どもを初めとした社会的弱者に対して、緊急で彼らの権利を制限する可能性があるときは、事前にステークホルダーを集め、そのリスクや長期的な影響を市民レベルで議論することが必要。

2) 緊急時に議論する際、権利の制限に関する共通の基準が必要で、子どもの権利条例のような法令や制度によって権利の保障のための基盤を整備する必要がある。

3) 緊急時にこれらに対して速やかに対処するには、通常時においての組織の基盤強化、人材育成が必須である。

4) 事業規模の小さな団体は相互のネットワーキングによって力を補い合い、底上げをしていくプログラム作りが有効である。

■参加者によるサブセッション

コロナ禍において、子どもたちの放課後の過ごし方は どう変化したのか？各現場の報告から考える 第１回コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議

（参加者記載の原文をそのまま記載している為、事実と異なることがあります。グループ毎に①、②・・・と記載）

① グループ

【みんみん】

- 体験活動なし教育委員会がダメ！
- 密を避ける企画を独自でやる。子どもの居場所で貢献できず！
- 公園利用は増える。近所の子どもだけでの参加、遊びがなし

【若狭児童館】

- 自宅待機できない子ども受入れのみ
- 中高校の居場所を失う
- 乳幼児の集いの広場ができず、母親の中には「久しぶりの大人との会話ができた。」と
- いう母親の声があった
- 専業主婦の親、内地からの孤立化した子育て
- 業がある人は話せるところがある
- 思春期の子どもと更年期の自分が一日一緒にいるのはつらかった
- 学校生活再開で骨折、ケガが多かった。体力の低下
- スマホ、ゲームで昼夜逆転
- 夏休み「おうちで児童館！」入口に折り紙、キメツの刃の塗り絵

【学童】

- 学童の子どもは運動場で遊べる

【まとめ】

- コロナウイルスに対する恐怖、初めての経験でどうしていいかわからず手探り状態だった
- 子どもの主体性や権利についての大きな柱がないために立場の違いや現場で対応がちぐはぐしていた

② グループ

- 糸満観光分野：畑違いの活動。普段、考えたことがない現実
- 一人親世帯の応援企画をしようとしたがコロナで出来なかった
- 糸満市のコロナ禍対策、糸満市観光農園で触れ合う企画（ファミリー層）ほっとな糸満の日
- 何か連携してやってみたいとは思っている
- 社協との協力「パティシエ」。親子企画。次年度もつなげていきたい
- 計画しないと進めない。模索中の１年
- いろいろな機会が奪われた。特に一人親世帯
- 行政のストップ。クラスターへの恐怖。自治体も初めての経験
- 怖さの後ろにやったあとの自己責任？良かれと思うことに臆病に
- 情報を得られるツールとしてオンラインは前に一歩に進める
- 奥入瀬渓流のイベント。青森のパック（お酒・ヒバのチップ・おつまみ）
- 楽しいイベントの中で
- 芝生の中でジャズ。子ども達を連れていきたい
- いろいろな組み合わせを考える
- コロナ禍になり、それぞれの組織の中での大儀からの判断で対応がまちまちになっている
- 子どもを中心に考えていく方が良いと感じた

・ 初めてのコロナ禍の経験の中で見えない敵とならないように有識者を巻き込んだ情報交換が必要

③ グループ

・ ICT 整備だけでは、体を動かす活動には繋がらない
・ 人数制限、１対１のスポーツ、ゲームをトーナメント方式にしたりしで接触しないようにしている
・ 他の児童館とは連携はとれていない
・ マンパワー不足　消毒作業に毎回 30 分
・ 施設の周囲で遊ぶ場所が少なくなった。逆に施設にこども達が集中
・ 地域の人との分断？
・ プレイルーム　感染予防対策　消毒

④ グループ

・ 大変だなぁ。受け入れてもらえる子ども達って幸せだなぁと思った
・ 同じ公園にいるけど友達同士遊べない…
・ 祖父母は頼まれたら受け入れちゃうけど…そういった機会が失われたんだろうな
・ 子育てを一緒に共有していたのに、それが途切れた感じがする
・ 祖父母の支えで共働きしている。若い祖父母は気を付けて孫を見ていた
・ プラネタリウム…公共交通機関を利用して来館する団体から見合わせが始まった。園バスがある所と差が出ていた。84 席だけど、1 団体 44 名、個別だと 22 名までの制限。全国のプラネタリウム団体から、換気能力や面積に合わせた基準を示したもので、それに合わせた
・ 交通機関がリスクを感じるので、バスの手配などをコロナ対策でやってくれたらいいなぁ
・ 遠くの公園への移動を減らし、近くの公園に集まるので、密集してしまう
・ ボール遊び禁止にするかという議論まで出てきている

⑤ グループ

【感想の共有】

・ 多くの方々がこどもに関わっているなぁ、繋がっているつもりだった。沖縄県というところを捉えてなかったなぁ。表に出てこなかったことで、問題が顕著にでた。今、気づけて良かった。どう行動していくか。ネットワークの中で、どう行動に生かしていけるのか、考えさせられた
・ 意外、プラスに働いた。ケータイで親御さんと繋がった
・ いかに子供の権利に繋がれてなかったか。インターネット環境で排除があった。こどもの権利をまもること、こどもたちの声を聞いて拾い上げていく。今後の活動に繋げていく
・ 子供の権利、立ち位置は違うが課題が整理されて見えた。地域に活動するにあたって、連携はあるので、地域に生かされていくに違いない。集まって話す場、大切。課題を知れた

⑥ グループ

・ みんなで集まって話すことが大切
・ 持ち帰って何ができるのかを考えている
・ 不安とストレスで、全ての人が行きづらくなった
・ 何が支援なのか、守るべきものは何か、わからなくなった。その中でも強

くならなきゃ、支援者をだれが支えるのか。そのもどかしさ。いい方向に転換したらいなと思う
- 居場所、ボーダー、療育、潜在的なニーズ。行き場がない。お金が払えない。拠点型の居場所ができたが、それでも足りない

⑦ グループ
- コロナがもたらした正の側面を見ていくことが重要なのでは？（オンライン普及、リモートワーク）
- ケアの格差がもともとあったところの格差がさらに広がったという印象深かった
- マイナス側面はじわじわと出てくる、自殺者の推移など、後から何が出てくるか
- 支援者の繋がりがどのようになされていくか
- 円卓会議により人に知ってもらうことができる
- 団体により、専門職の方がいる。ボランティアさんが主体で専門職と繋いでいる。団体により役割が違う
- 市民活動ベースでやることと行政がやることとの連携をどのようにとるのか
- 遊びは不要不急だ、音楽が不要不急で後回しになっているのは問題では
- 行政と専門家のプラットフォームのようなものがどのように機能しているか
  →部会にて協議はなされている。子どもの権利に立脚ではなく、感染対策が中心になる。不要不急ありきの議論になる。（島村さんより）
- 行政が現場を見る機会がないため、子どもの権利、遊びの重要性への理解が得られない
- 今後は分野ごとに感染対策が盛り込まれていく
- 医療従事者の視点からすると個人のcovid19 自体の理解があれば、正しく恐れることができ、遊びに対しても許容できた部分があるのではないか
- 行政がしていると安全策を取りがちになってしまう

第１回コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議
参加者アンケート集計

◆概要

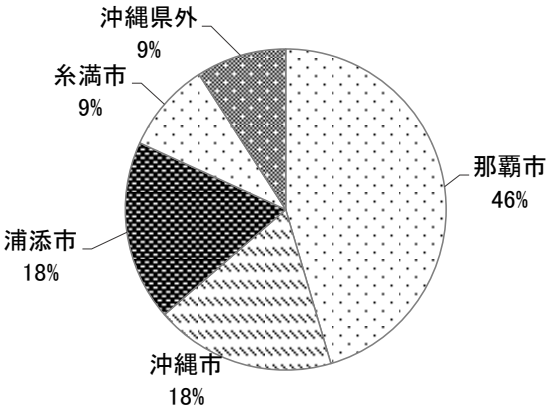
・日時：2021 年 3 月 24 日（水）18:30-21:10

・場所：オンライン会議システム（zoom）

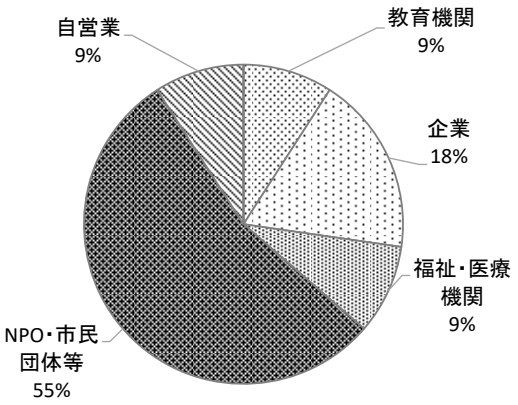
・着席者：11 名（論点提供者、司会、記録者含む）

・参加者：19 名（アンケート回収 11 名、回収率 57%）

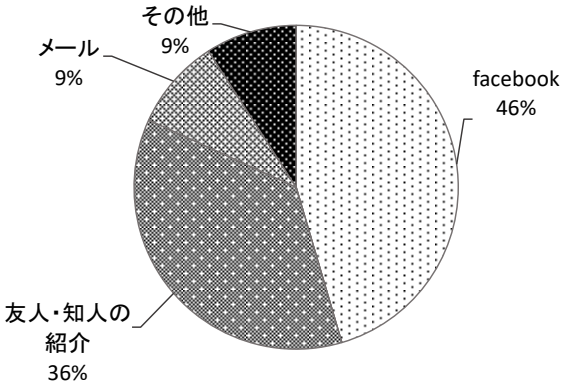
１．お住まいの市町村



２．所属



３．円卓会議をどのように知ったか



４．満足度

平均：4.6（5 点中）

5.満足	4.概ね満足	3.普通	2.あまり満足してない	1.不満足
7 名	4 名	0 名	0 名	0 名

５．満足度の理由

（５．満足）

- 参加の目的である円卓会議の方法を学ぶことを達成できたため。他地域の子どもを取り巻く現状を知ることができたため。参加者の皆様と交流できたため
- 普段きけないはなしをきけた
- 子どもの権利に言及していたこと
- 支援が必要な子供たちを支えている団体とのつながりができた事
- 様々な団体や個人が、「子どものために」と試行錯誤しながら取り組んでいること、現代社会に生きる子どもの環境をとらえることの大切さを教えていただけたから
- コロナ禍における子どもに関わる方々の現状を知ることができて自分たちのこれからの方向性を考えるヒントをもらえた
- 論点がはっきりしており、現場で取り組んでいる団体さんの生の声やグループディスカッション。島村教授や中村議員、新垣記者や進行の平良副理事の助言や発案がとても勉強になりました。途中参加で 2 団体の発表を聞き漏らしたのですが最後の宮道さんの記録振り返りがとてもわかりやすくて助かりました

（４．概ね満足）

- 少し論点が多く、消化することにこれから時間がかかりそうな印象でした
- 様々な意見から、課題を知ることができた
- 報告で現場の現状を知ることができたことはよかったです

6. 円卓会議で印象に残ったこと

- 子どものことを考えているのに、子どもが中心にいない議論がなされていること。島村先生の「児相などに頼るのではなく、身近で守るしかない」という言葉。
- 子どもの権利という視点で考えることができた
- 子どもの権利について話があったこと
- ZOOM が機能していた
- 島村先生からのご発言で、「子どもの権利は、大人の都合に左右される」というのがとても印象的でした。子どもの声をいかに聴くことができるのか、子どもがいかに想いを伝える手段があるのか、一万人井戸端会議さんの実践、ちゅらゆいさんの計画、とても参考になりました
- 子どもの権利条約、子どもを市民として考える視点の欠如、子どものことで確固たる施作が必要で島村教授が言われるように子どもの権利について本気で議論する時がきている
- コロナ禍における子ども達の現状と、試行錯誤しながらも現場で支援をされている皆さまの取り組み。連携や役割分担の大切さなど興味深い議論でした
- 各団体、組織、施設が個々にがんばってさらに疲弊している印象だったので、ポータルサイトや地域住民を取り込んだり一般ボランティアなど活用して、もっと連携、協力して、こども達のためにサービスの過不足やアイデアを共有して共助へと発展して欲しいです

7. 会議運営に関しての意見、感想

- 少しネットが弱くなる時があるようでした。実行団体の方々の話がたくさんあったので、消化しきれないところがありました
- 多くの情報を得ることができて感謝しています
- とてもよい機会でしたありがとうございます
- いつものようにこなれています
- 今後、自分の立場で協力できることは何か？いろいろと考えることができました
- ブレイクアウトルームが不慣れなため、最初はどう対話をしたらよいのか迷ってしまい時間が過ぎてしまいました（リアルではない難しさを実感)。盛り上がってきたときにタイムリミットになってしまったのが残念です
- 全体を通して、オンラインでも不自由なく参加できたことに感動しました。次から次へと進行がスムーズだったことは、参加者としてとてもありがたかったです
- いつもいろんな論点が出る中わかりやすく絞っていってくださるので道を迷わず集中してワークに参加していられます。板書でのふりかえりも自分の中でのふりかえりができてありがたいです。ファシリテーター力と板書力の勉強をまたしたいと本日また思いました
- 車の運転が出来ないのでズームで参加出来てとても良かったです。飛び込み参加になってしまいましたが丁寧なご対応本当にありがとうございました
- 報告で現場の現状を知ることができたことはよかったですが、それでこれからどうしていくべきか、改善するために何ができるのか、アイデアや取り組みを実践してみてどうなった等、前進や希望が感じられ難いのが歯がゆく感じました
- グループセッションは時間が足りず、各々の発言意見の記録書き込みに気をとられ、意見を深めてまとめられず中途半端に。

＜板書記録

コロナ禍の子ども支援者 地域円卓会議

第1回

94回目

地域の困り事を社会課題として共有・共感する場

2021.3.24(水)
18:30～21:10
@オンライン会議システム(Zoom)

テーマ
コロナ禍において、子どもたちの放課後の過ごし方は、どう変化したのか？
各現場の報告から考える。

鶴田厚子さん (公財)みらいファンド沖縄
中村圭介さん (那覇市論点提供)
島村聡先生 (沖縄大学)
新垣綾子さん (沖縄タイムス社 記者)
〈司会〉平良斗星さん (公財)みらいファンド沖縄
〈記録係〉宮道事一 (NPO法人まちなかアートプロジェクト)

■ 実行団体と報告者

- 1万人井戸端会議 代表理事　南信乃介さん
- おきなわジュニア科学クラブ 代表理事　宮城薫さん
- 沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい事業推進部長　今木ともこさん
- 一般社団法人琉球フィルハーモニック事務局長　上原玲子さん
- 沖縄県学童・保育支援センター　山崎新さん（那覇市国場児童館館長／事業の実行委員）

2021.3.24 資料 1

鶴田厚子さん ＜論点提供＞
みらいファンド沖縄

- 休眠預金の活用
- 2020.8月　資金提供団体として採択
- コロナ禍で孤立したNPOとその先の支援
  ～アフターコロナに必要な団体の存続のために～
- 実行団体　6団体 → 内、今日5団体
  ジャンルしぼらなかったが、結果 子ども分野
- 2020.10～2021.5
- 最大助成　360万円

実行団体報告

NPO法人1万人井戸端会議
南信乃介さん

公民館の閉館3回→課題の見える化

活動概要

課題の見える化と行動できるコミュニティへ
―コロナ禍をきっかけに日頃の地域力アップ―

①高齢者、障がい者、子育て世代の困りごと支援団体がキャッチするしくみとコロナ対策
現状共有、研修、オンラインでの交流、若い世代のアクション支援
②既存の居場所利用者の困りごとをキャッチできる機能の向上
公設・民設の居場所の研修、居場所と利用者との交流促進
③コロナ禍でもアクション出来るコミュニティネットワークの構築
上記の関係者とで未来へのビジョン共有、計画に反映

- 子どものおくりむかえでコミュニケーションあった
  └何げない会話が重要だった
- まちづくりへの参加者を増やしていこう
- 新しい生活様式
  20・30・40・50代とくんでいく、担い手になっていなかった

2021.3.24 資料 2

コロナ禍で子どもたちに何が起こった？

小学生

聞き取り
- ゲームしていた
- 真面目に自宅ですごしていた
- 生活リズムの崩れ
- 家での自由な時間が多かった。集中力が短くなった
- 再開したらとっても疲れて学校から帰ってくる。体力も低下。
- 宿題が多かったことに疲れている。やり遂げられない。
- 不登校。
- 家庭環境の変化(仕事やめる、手続きできない、休職)

支援員の推測
- 家庭の負担が大きかったのでは。三食作り、宿題見て、仕事に行って、
- １波は家庭と向き合う機会ともなり必ずしもマイナスではなかった。
- ２波は職場が休みとは限らないため負担が重なっていたのでは。
- 食料提供は助かった(いまいパン、シェアマーケット等)
- 来ていない子、つながりのない家庭は見えない。
- コロナを取り巻く不安を抱えて不登校、夜中起きて泣く

中高生

- ゲームをして過ごしていた。
- 昼夜逆転、夜3時まで起きていた。
- 目標の部活、大会、行事がなくなった。
- インスタで友達と交流
- 通信のゲームで友達と過ごした。
- 外に出たい、家から出たい、学校行きたい、遊びたいとずっと思っていました。
- 徐々に感染者が増えていくとつらかった。
- ストレスがたまらなかったから体調が良かった
- 好きな時に好きなだけ食べていた
- 48時間電話したり、ゴロゴロしていた。

2020年4月～7月公民館ヒヤリング

何が奪われた？

直接的
間接的に
実は奪われて
いたこと

実はコロナ禍で奪われていたことに気づいた？
- 子ども達が遊びたい友達と過ごせる放課後
- 時間があるのに家族団らんの生活習慣
- 学びたい、やってみたい気持ち、きっかけ
- “教える”を学校に預けすぎていたこと
- 公園や海など外遊び、体験活動

2021.3.24 宮城 3

実行団体報告

今木ともこ さん
ちゅらゆい
2013 kukulu

- 事業所とじることあった
- 家にいることがリスク高い子たち
- つながりつづけるしくみが必要
- スタッフが働けること　安心して
- ICTの整備へ.

4つの事業所

18歳～	働く・学ぶ・遊ぶをともに楽しむ コミュッと！	・一人で過ごすことへの不安感が増した ・うつ状態がひどくなった ・外出するのが怖い ・ひきこもり状態の人がテレワークで作業に参加できた
中高生	すべての子どもに居場所を kukulu 那覇市 うるま市	・居場所の友人と連絡を取り合えない（オンライン居場所） ・ネット環境がない世帯が20% ・親がメンタルダウンして進学の手続きができない ・もともと不登校のため休校に関しては問題がない ・オンライン授業に出席できた
小学生	地域の子どもの、もうひとつの家 bigからふる田場	・DVが重篤化した（発見機能が麻痺） ・訪問要求が増えた ・本人が携帯電話を持っていない ・親と連絡が取れるようになった（チャレンジ動画）
その他		・親、本人の雇用、経済状況の悪化 ・行政のオンライン支援についての理解・対応が遅かった ・対応マニュアルの作成に追われる ・県内子どもの居場所の実情が見えにくい

オンラインはよい.
子ども・若者支援
ゲーム
オンライン居場所
ポータルサイト つくっている
相談

- 行政のオンライン支援についての理解
  対応おそかった
- 対応マニュアルの作成
  そしき基盤の強化 ㊀
- 正解のない中 決める. たいへん
- 子ども居場所 実情みえにくい、よりまわせない

2021.3.24 宮城 4

実行団体報告

上原玲子さん

琉球フィルハーモニック 事務局長

那覇ウエスト
ジュニアジャズオーケストラによる
子どもの居場所づくり　5年目

プロミュージシャンの謝金
楽器メンテナンス
コロナ対策用品と
成果発表会のキロンの機材と
キョリ保っての入場 → ピンマイク

- 先におしゃべりしてから演奏へ。
- 学校行事中止 → ゆうーの楽しみ
- こられなくなる子も
- 親のDV 重くなり、来れなくなった
- おわりの会 → 司会こどもたち
  大きな声だすキカイもない
- 期待　参加したいという声
- ストレスをかい消する場として。
- 若サ公民館 ー 広いスペース
- 成功体験 → 音だす、曲できる

2021.3.24 宮通 5

実行団体報告

山崎新さん

国場児童館 館長

はじまりは２０２０年８月・・・。

児童館では…
・まちから子どもの声が消えた！今も利用者減。
・（病みそう）（ゲームしかやることないじゃん…）
・児童館は利用制限。「働く親の子」以外の遊びは保証しないって、格差をどうするの？

放課後児童クラブでは…
・学校に相談し、校庭を開放してもらって遊びを確保。
・接触して、人と関わって成長する時期に、遊びを制限して、発達に影響はないのか…。

子ども食堂では…
・公園やビーチが閉鎖。遊びに連れて行くのに苦労。
・近隣の公園で遊ぶ中学生と地域の方がトラブルに。
・我慢している子ども達の心と身体が心配…。

このままで良いわけないよね…。

NPO法人学童・保育支援センターへ相談

・ももやまこども食堂
・一般社団法人千和（放課後児童クラブ）
・コスモストーリー保育園
・那覇市国場児童館

情報交換をして気づいたこと

①子どもに関わる組織同士の繋がりがなく、0歳～18歳までの子どもの事を、包括的に議論して社会に発信する場がない。
②子どもの権利が守られていない中で、子どもの遊びは保証されない。

じゃあ、アクションを起こそう！！

子どもとあそびプロジェクト
～にんげんっていいなの会～

悩みも発信

ネットワークで
子どもの環境を
よくしていく

三密を避けるのは
不可能…

活動スタート！

事業目標
・子どもの遊びを支える大人が繋がり、コロナ禍でも子ども達が安心して遊べる環境について学ぼう！
・遊びが子どもの成長・発達に必要な権利であることへの理解を広げよう！
・子どもと子どもの遊びを支える支援者ネットワークをつくろう！

取り組み
・子どもの居場所のアンケート＆状況調査
・感染症内科の高山先生と感染症対策勉強会
・子どもの居場所の感染症対策ガイドブック作成
・メディアでの発信
・モザイクアプローチを利用した子どもの遊び調査
・ネットワーク窓口としてＦＢ開設
・子どもの環境を考える勉強会

児童
保育

2021.3.24 宮通 6

実行団体報告

宮城 薫 さん

おきなわ ジュニア料理クラブ

(オンライン)

- 沖縄市で H28 ～ 子どもの居場所
- 美ら団子 × フードステーション
  配食(宅食支援)

R.2.4.1

- 50人の子(困り感ある子)
  コロナ　ひとり親家庭
- 不登校・登校しぶり 12% → 43%へ.
- 関わりうすくなった子 → ネグレクト
  非行問題悪化

改善したこと

- コロナでも、親と話しができた

- 養育必要な児童の ケア格差 大きく
- ネグレクト ～ 原因
- ケアの格差
- コロナ起因 ～ よりこもったり
  いっしょにいてもよい状態ではない
- ケアの密度

2021.3.24 宮城 7

島村 聡 先生

沖縄大学 教授

1年をふりかえると

- あたりまえが、あたりまえでなかった
  学校休み ～ 職場は休まらない
  児童館 閉めなさい ～ 学童 あずかって
- 子どもたちの立ち場に立たなければ
- 守らなければ、 → 当初は しめる. あるいは しかたない
- でも 経験し、ノウハウ つんできて
  → おくれている
  改善がなかなか進まない
- 行政が率先して検証し、発信を
- 子どもの権利が
  大人の事情に左右されている現状

中村 圭介 さん

那覇市議会 議員

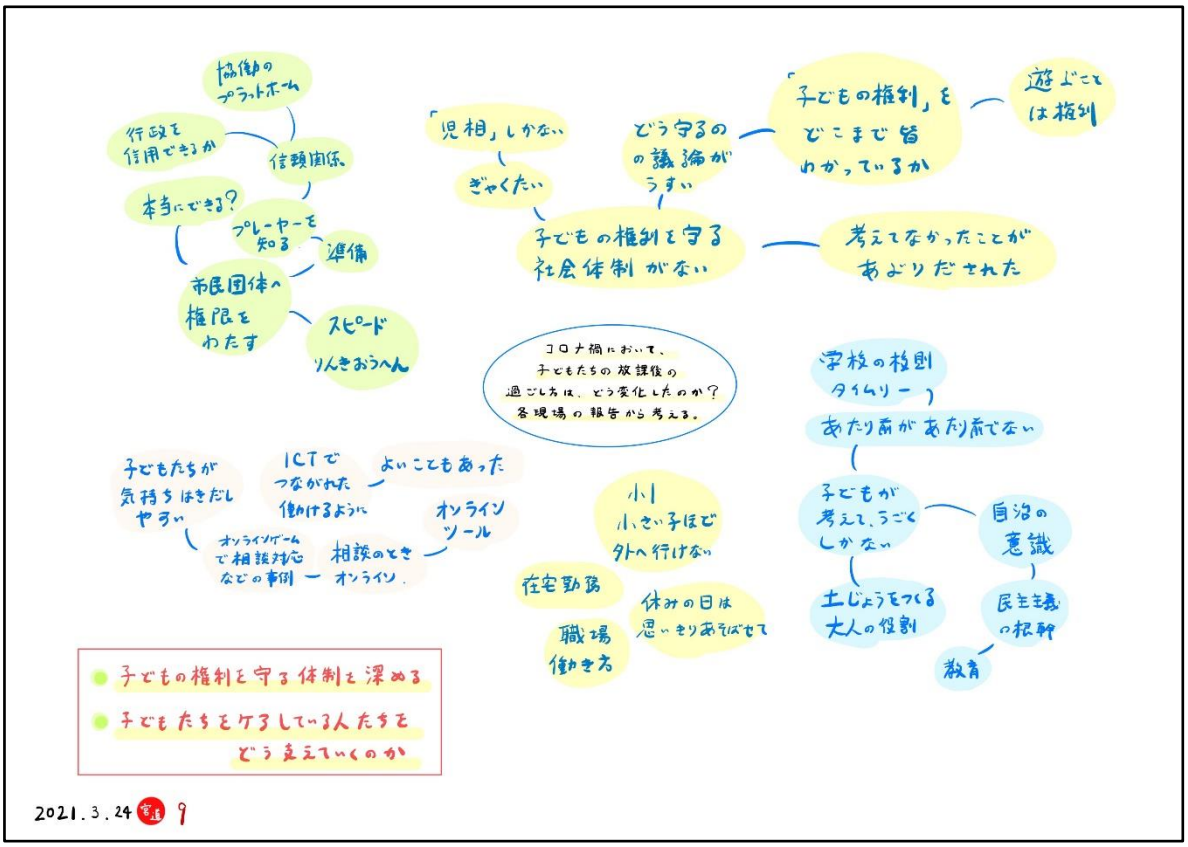
- 団体によりそえていなかったこと
- そしき化していないネットワークを支えることも考えないと
- 統合使うところ、民間連合使うところ
- 子ども権利保障

新垣 綾子 さん

沖縄タイムス社 記者

- 各団体のしこうさくご
- 調査を実施
- 低所得世帯はより厳しい状況
- 養育必要な家庭の格差の改善
- 「あそび」は不用不急ではない.
- こどもを介した感染はそこまでない
  などの科学的情報の発信
  → メディアとしての役割
- 過剰な制限ないように

2021.3.24 宮城 8


協働のプラットホーム
行政を信用できるか
信頼関係
本当にできる?
プレーヤーを知る
準備
市民団体へ権限をわたす
スピード
りんきおうへん
「児相」しかない
ぎゃくたい
どう守るのの議論がうすい
「子どもの権利」をどこまで皆わかっているか
遊ぶことは権利
子どもの権利を守る社会体制がない
考えてなかったことがあぶりだされた
コロナ禍において、子どもたちの放課後の過ごし方は、どう変化したのか?各現場の報告から考える。
学校の校則タイムリー
あたり前があたり前でない
子どもが考えて、うごくしかない
自治の意識
土じょうをつくる大人の役割
民主主義の根幹
教育
子どもたちが気持ちはきだしやすい
ICTでつながれた働けるように
よいこともあった
オンラインツール
オンラインゲームで相談対応などの事例
相談のときオンライン
小!小さい子ほど外へ行けない
在宅勤務
職場働き方
休みの日は思いきりあそばせて
子どもの権利を守る体制を深める
子どもたちをケアしている人たちをどう支えていくのか
2021.3.24 9